

より良い英語学習のために：個人差理解の研究

東京理科大学 教養教育研究院 野田キャンパス教養部 准教授 やすだ としのり 安田 利典

■ はじめに

突然ですが、皆さんは「お祭り」という言葉を聞いて、最初に何を思い浮かべますか？ 語義からすれば何かを祭る催しなので、その中心は神輿、山車、踊りなどのはずです。しかし、かき氷、綿あめ、焼きそばなど、立ち並ぶ屋台を直感的にイメージした方も多いのではないのでしょうか。

筆者は理系（広く言えば、英語系学問を専門としない分野）にとって英語とは、この屋台のようなものだと考えています。確かにその分野の中心ではないかもしれませんが、しかし、その存在感は（屋台と同じく）非常に強く、かつ当該分野をより華やかに彩ることができる、それが英語の位置づけなのです。

とは言え、この英語に苦勞している方もいると思います。英語学習・習得を研究する分野として応用言語学や英語教育学がありますが、これらの分野は大変学際的であり、他分野からの知見も相俟って複雑で興味深い様相を見せています。筆者は現在、英語学習・習得について心理学的に研究しています。本稿では、この観点から、以下4点について述べたいと思います。なお、ここでは英語を学ぶプロセスを英語学習、その結果としての習得を英語習得と呼ぶことにします。

1. 個人差を理解する：
なぜ英語ができる人とできない人がいるのか
2. 筆者の研究の紹介：
最近の興味深い知見には何があるか
3. 個人差を統合的に理解する：
科学における「言葉」の重要性
4. 英語とどのように向き合うか：
自律した学習者としてのウェルビーイング

■ 1. 個人差を理解する：

なぜ英語ができる人とできない人がいるのか

一般的に、多くの人は日常生活に困らない程度の母語を獲得できます。その過程で苦勞することもあまりありません。一方、英語（外国語）に関しては、習得

できる人からできない人まで千差万別です。こうした差をもたらす主要因の1つが学習者の個人差要因であり、学問的にも盛んに研究されてきました。例えば、やる気の度合いや学習方法の違い、各々の性格や感情状態までもが英語学習・習得に影響すると言われていきます。まずは、この個人差要因について、先行研究に基づきながら紐解いていきたいと思います。

【学習時間】

英語習得には時間がかかります。ある試算によると、中級レベル（英会話に適切に参加できる、テレビのニュースが理解できる等）に到達するには4,000時間以上が必要ですが、このうち中学、高校、大学2年までの一般的な英語教育でカバーできるのはせいぜい1,100時間程度だと言われていています（松村, 2009）。残りの約3,000時間の学習が個人の裁量によることを考えると、学習時間の確保が個人差要因としていかに大きな影響力を持っているかが分かるでしょう。

また、日本語母語話者には特に学習時間が重要だとする根拠もあります。米国のForeign Service Institute (FSI) が発表している資料では、英語母語話者にとってどの言語が習得しにくいかをカテゴリに分けて説明しています。これによると、日本語は最も習得しにくいカテゴリに分類されています。逆に習得しやすいカテゴリには、スペイン語のような英語と類似性の高い言語が並んでいます。FSIの資料は、あくまで英語母語話者が日本語を習得する際の目安ですが、このことは英語と日本語が言語的に異なった特徴を持つことを示しており、日本語母語話者の英語習得にもそれだけ時間がかかると考えていいでしょう（日本語での詳細は廣森（2015）等を参照して下さい）。

【学習方略】

学習時間を確保できたとして、次にそれをどう使うかが重要になります。すなわち「どのように学習すべきか」という学習方法が、個人差として大きく影響します。学習方略は長い間研究の対象とされてきましたが、近年では数多くある学習方略を自分のニーズに合

わせてどう適切に用いるかが重視されています (Oxford, 2011)。これは個々人が英語とどう向き合うかにも深く関連するため、詳細は第4節に譲りますが、(1) 学習方略に関する知識を得ること、(2) それらを適切に使って学習を遂行することが重要になります。例えば、単語を覚えると一言と言っても、考えるべきことは山ほどあります。英会話で必要な単語を習得したい場合、大学受験用の単語帳を電車で眺めるのが最適な学習方略なのでしょうか。そうした疑問を持ち、具体的な答えを模索する作業が必要なのです。

【適性】

現実問題として、英語習得に向いている人もいれば、そうでない人もいます。こうした個人差を示すのが適性という考え方です。Carroll (1981) では、英語習得に向いている人が持つ能力として、(1) 音を敏感に識別する能力、(2) 文法的な機能やパターンを見出す能力、(3) 音と意味の結びつきを記憶する能力、(4) 言語情報から特定のルールを推測する能力を挙げており、近年でも主軸の考え方の1つとなっています。

ここで注意すべきは、英語習得には適性が必須というわけではない点です。ここで言う適性とはあくまで対象言語をいかに早く容易に習得できるかを予測するものであり、実際の最終到達度とは別の問題なのです (廣森, 2015)。これは心理学で提唱されている GRIT (やり抜く力) とも一致する知見です (Duckworth *et al.*, 2007)。長期的達成のために情熱や忍耐を持ち続けることはときに才能を凌駕します。重要なのは、適性という考え方に左右されないことだと言えるでしょう。

【性格】

各学習者の性格も英語学習・習得に影響すると言われています。例えば廣森 (2015) は、論理的に想定される関連として、内向的な学習者は、時間をかけて洋書を読む、継続的に英会話のラジオを聴くといったインプット活動を好む一方、ペアやグループによる口頭での活動には抵抗を感じる可能性があるとしています。外向的な場合、その逆が想定されるわけです。これは、性格によって英語学習に差が生じ、結果として英語習得にも偏りが出ることを意味しています。

また、英語学習を含む学業成績全般という視点で見ると、注意深く自制的である、新しい考えに対してオープンであるといった性格特性は、一般的な知的能力よりも学業成績との関連が強いとする研究結果もあり

ます (Poropat, 2014)。これは、性格の与える影響力の強さを物語ると同時に、私たちの常識的感覚を覆す結果でもあり、非常に興味深い知見だと思います。

【動機づけ】

動機づけとはいわゆる「やる気」のことであり、英語学習にとって非常に重要です。研究が重ねられてきたおかげで、「やる気」を高める要因がいくつか見つかっています (Dörnyei & Ryan, 2015)。例えば、将来の理想像を強くイメージできるとやる気は高まります。留学先でネイティブの学生たちとスムーズに議論を繰り返している、英語を使って颯爽と仕事をしているといったイメージは自分を奮い立たせてくれるはずです。また、誰かにやらされているよりも、自分が心底やりたいと思って英語に取り組むほうがやる気が高まるのは想像に難くありません。一方で、義務感を上手に活用するのも良い方法です。提出すべき課題やその締切があるからこそ、人はやる気になれるということも確かです。大切なのは、これらの動機づけ要因のどれか1つに絞る必要はないということです。自分を奮い立たせる手段を複数持ち、常にやる気を維持できるよう工夫するのが重要です。

【感情】

英語学習には感情が大きく影響します。最も注目されてきたのが不安感情です。例えば英語を話すとき「先生に当てられたら嫌だな」「皆に下手だと思われたらどうしよう」と尻込みした経験がある人も少なくないでしょう。こういう感情を持つと、本来の英語力を発揮しにくくなるのは確かです。しかし一方、不安は原動力にもなります。例えば、不安があるからこそ、しっかり準備をして授業に臨むかもしれません。

先行研究では不安感情を対象にしたものが多く、それだけ英語学習には不安が伴うということかもしれません。よって、もし不安を感じたとしてもそれは自然なことだと言えるでしょう。しかし、人間には不安以外にも多数の感情が存在します。退屈、憂鬱、怒りから、喜び、充足、興奮まで、様々な感情が英語学習に関連すると思われます。さらに言えば、感情は英語学習だけに関連するものではなく、常に人生の中心部分に存在し続けると言ってもいいでしょう。英語学習を通して感情を噛みしめ、上手に統制することは、英語を越えた人生の豊かさにもつながるかもしれません。

【信念】

ここでの信念 (belief) とは、主に英語学習・習得をどう思うのだと思っているかを意味します。例えば「数学が得意な人は、英語を習得するのが苦手である」「ネイティブの先生から習ったほうが、英語が上手くなる」といった考えを（それらの正否は別に）どの程度強く持っているかということです。もし前者の信念が強ければ、理系の学生として英語への苦手意識が抜けるのに時間がかかるかもしれません。実際は、理系でも英語ができる学習者は数多くいますし、これを裏付けるような研究結果は筆者の知る限りありません。また、後者の信念が強ければ、英語母語話者の教師の授業を好むことになるでしょう。もちろん、そこでこそ効率的に伸ばせる能力もあるでしょうが、一方で日本語で英文法を学ぶことなく英会話だけを繰り返しても、効果は薄いかもしれません。

こうした信念は経験を通して形作られ、一度固まると変化しにくいとも言われています。ゆえに自分がそうした信念を持っていることすら、日常では意識しにくい可能性があります。しかし、上述のように各人の信念が英語学習方法を決定し、ひいては結果としての英語習得に影響することは想像に難くありません。今一度、自分の信念を掘り返してみる必要があるかもしれません。

【創造性】

創造性が英語学習・習得に影響すると言ってもすぐにはピンと来ないかもしれません。まずは創造性という概念を具体的に見てみましょう。心理学の主流では、創造性には2つの種類があります。1つは拡散的思考と呼ばれ、アイデアを次々と生み出す能力であり、もう1つは収束的思考、すなわち多くの情報をまとめてより良い解決策を模索する力です。近年では、総合的な創造性の発揮には両者ともが必要だと考えられています (Sawyer, 2012)、どちらが得意かは個人で異なることも多いようです。

もし前者が得意なら、矢継ぎ早に英語で話すのに向いているかもしれません。次々とアイデアを思い浮かべることができれば、結果として話す情報量が多くなります。情報量が多ければ多少ブロークンな英語でも全体の意味が伝わる可能性は十分あり、その点でもこれは重要なポイントです。後者が得意な場合、散らばった情報に筋を通し、論理的に矛盾がないアウトプットを行うのに向いているかもしれません。これは論文

などの執筆に大きなプラスになると考えられます。このように創造性は、英語のどの側面が得意・不得意かに関係し、結果として学習過程で何をどう伸ばすべきかという方向性にも関わってくるのです。

■ 2. 筆者の研究の紹介： 最近の興味深い知見には何があるか

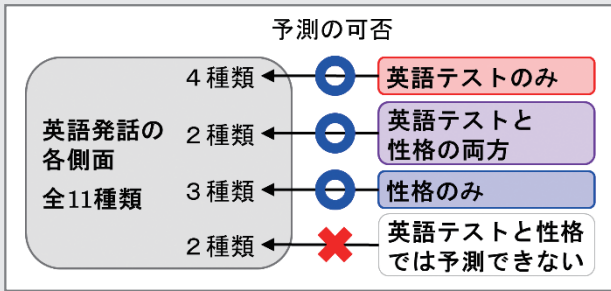
ここまで、個人差が英語学習・習得に与える影響について先行研究に基づいて概観しました。この節では（手前味噌で恐縮ですが）最近の興味深い知見として、筆者が行った研究をいくつかご紹介します。

【英語のテストより性格のほうが予測力が高い？】

「私はTOEICで900点を取りました」と聞いたとき、皆さんはどう感じますか？「きっとこの人は英語がスラスラ話せるんだろうな」と思う方もいるかもしれません。就職活動でTOEIC® Listening & Readingの点数を重視する企業も、こうした前提に立っている可能性があります。特定のスコアからその人の英語力を予測できる度合いを「予測力」と言います。例えば、TOEIC® Listening & Readingのスコア（スピーキングは含まれない）から英語スピーキング力をどの程度予測できるかを統計的に測定したものが予測力になるわけです。

一方で、一言にスピーキング力と言っても実は様々な側面があります。例えば、発話スピード（一定時間内にたくさん発話する力）、難しい単語を使う力、言い直しを減らしスムーズに発話する力などです。筆者が行った研究では、こうした発話の各側面11種類に対して「英語テスト」（TOEIC® Listening & Readingと類似性が高く、スピーキングセクションは含まない）と「性格」のどちらの予測力が強いかを調べました (Yasuda et al., 2019)。一般的に考えれば、スピーキングを含まないとは言え英語のテストなので、性格よりずっと予測力が高くて然るべきでしょう。

しかし、結果は驚くべきものでした。確かに全体的には英語テストのほうが予測力強い結果となりました。具体的には、11種類の英語発話のうち、英語テストでしか予測できないものが4種類、英語テストと性格の両者が予測に関わるものが2種類ありました。一方で、英語テストは全く関係せず性格でしか予測できない側面が3種類もあったのです。詳細については様々な統計値を加味して考察するのですが、結果を簡単にまとめると以下ようになります【図】。



【図】英語発話に対する英語テストと性格の予測力

性格のみが関連している例として「自己修正や言い直しの数」を挙げます。皆さんは下記のような発話を聞いてどう感じますか？ 本来は黒文字の箇所のように発話しなかったのですが、赤文字の箇所間違いに気づいて言い直しているのです。このような言い直しは、文の正確さを担保する上では重要な努力です。しかし、言い直すことで発話の流暢性が阻害され、聴き手にはかえって理解しにくい英語になってしまう可能性もあります。

In the museum, **the people...**, **no**, the person **who wears...**, wearing a yellow jacket **is**, **ah...**, was really excited about **the pictures...**, **I mean**, the masterpieces.

さて、この言い直しですが、英語力が高ければ当然その数も減ると思いませんか？ この研究では異なる結果を示していました。言い直しの多寡は、英語テストの得点の高低とは関係なかったのです。つまり、テスト得点が高かるうが低かるうが言い直しが多い人は多いという結果だったのです。その代わり、性格がより強い予測力を示していました。具体的には、不安の強い性格の人はそうでない人に比べて言い直しの数が多かったのです。「TOEIC® Listening & Readingのスコアを加味して雇ったのに、どうもこの人の英語は言い直しが多くて理解しづらい」と企業の担当者が感じたとします。それもそのはずです。この場合加味すべきはテストスコアではなく、不安の感じやすさという性格面の可能性があるのです。このように我々の一般的な感覚と異なるという点で、この研究結果はとても興味深いものだと言えるでしょう。

【能力を発揮できるか否かは状況によって変わる？】

では次の研究です。タイトルだけ見ると当たり前のように見えるかもしれませんが、詳しく覗くとなかなか興味深い部分が見えてきます。

先述のように、個人差要因である創造性の有無を示す指標の1つに拡散的思考があります。次々にアイデアを生み出せる思考力を指しており、1つの概念から連鎖的に別の概念を想起する力に関連すると言われています。一般的に考えると、こうした思考に優れている場合、話すべき内容を矢継ぎ早に発想することが可能となり、結果として、英語発話においても一定時間により多くの情報を詰め込むことができるように思われます。

実際筆者らが行った研究でも、これは部分的に実証されました (Suzuki et al., 2022)。あるトピック (The Tokyo Olympics in 2020 will bring economic growth to Japan.) を提示して、それにどの程度賛成かを自由に述べてもらうタスクにおいては、拡散的思考に優れているほど発話量が多いという結果になりました。しかし、別種のタスクでは、この思考の優位性が抑制されてしまいました。例えば、セリフのない3コマ漫画を提示して内容を英語で説明してもらうタスクでは、拡散的思考が優位かどうかは、発話量の多寡とは無関係でした。漫画の内容を説明するタスクでは、すでに説明する内容や使うべき単語がある程度決まっているので、拡散的思考の優位性を発揮する余地がなかったことに由来すると考えられます。

このように考えると、状況説明は苦手だが、英語で自分の意見を言うのは得意（あるいは逆も然り）という差にも説明がつくかもしれません。すなわち、特定の状況において英語が上手に使えなくても、他の場面ではそうとは限らないわけです。もし皆さんが授業中の1つのタスクで上手くいかなかったとしても、決して落ち込む必要はないのです。

以上、細かい点も含めつつ、実際の研究を紹介しました。近年に至るまで個人差への理解が進んでいますが、実証されていない部分も多く、それだけに興味の尽きない研究分野だと言えるでしょう。

■ 3. 個人差を統合的に理解する：科学における「言葉」の重要性

ここまでは、英語習得・学習に影響する個人差要因をひとつひとつ個別に紹介してきました。しかし、

個々人を切り取って見れば、これらの要因は個別に存在しているわけではありません。一人の学習者が全ての要因を内包しており、かつ各要因は複雑に絡み合っていて存在しているのです。例えば、ある学習者が「流暢な英語で日常会話を楽しみたい」という学習目標を持っているとします（動機づけ）。同時に「そのためには語彙が必要だ。語彙学習とは日本語と対応させて覚えることだ」と考えているとします（信念）。それに伴って単語帳を使って覚えようとはしますが、実際は英会話をする機会は持てず（学習方略）、いざ授業で英会話をするとなると強い緊張を感じるかもしれません（感情）。

英語学習者の個人差理解の研究は、各要因を個別に理解する重要性を維持しつつ、それらを統合的に理解する局面に入ったと言えるでしょう。そして、この統合的理解は第4節のトピックである「英語とどのように向き合うか」を考えるのにも大変重要です。これに伴い本節では、科学的方法論の種類について少しだけ言及しておくことにします。

英語教育学や心理学の研究で用いられる方法論には、大きく分けて量的研究と質的研究の2種類があります。量的研究とは主に数値を使う研究であり、通常は複数の参加者からデータを集め、何らかの方法で数値化し、統計的分析等を行い、結果を吟味して考察することになります。一方で質的研究とは、主に言葉を使った研究と言えます。例えば、学習者にインタビューを行いそれを書き起こして分析する、授業を観察してその内容を言葉で説明して解釈するといった方法論です。

実際には、これらは明確に区別できない部分もありますし、両者を適切に融合して使うとより妥当な結果が得られるとする主張もあります。しかし、誤解を恐れず言うと、個人差要因を個別に調べるこれまでの研究では、量的研究が多用されてきました。例えば、上述の Yasuda *et al.* (2019) では、60名の日本人英語学習者に対する数値データを分析し、性格的に不安が強いと言い直しが多いという知見を見出しています。一方で、個人差要因を統合的に理解する研究は質的研究との親和性が高いと言えます。上述の「流暢な英語で日常会話を楽しみたい」の例で示した状態像を数値だけで表現するのはかなり難しいと言わざるを得ません。

こうした方法論の違いは、研究の目的や性質にも大きく影響されるので、何が良くて悪いという話ではありません。しかし、科学には数値を用いた研究だけで

なく、言葉を用いた研究も存在するという認識を持つことは重要です。量的研究と同様に、質的研究にも長い歴史を経て様々な方法が確立されてきているのです。

このように、誰かが語った言葉を精緻に分析すれば、その人の人となりはもちろん、そこから普遍的な原理を見出すこともできるかもしれません。科学における質的研究の存在は、人が自分自身について語るということ、そしてひとつひとつの言葉に真摯に向き合うことの大切さを示しているとも言えます。このことは、次節のテーマにとって大変重要な考え方になります。

■ 4. 英語とどのように向き合うか： 自律した学習者としてのウェルビーイング

ここまでで述べたように、時間確保、性格、感情など、各人の日常においてごく当たり前のものが英語学習・習得に影響します。これは、英語学習・習得が当該学習者の生活と深く関連しており、ひいては人生の一部になり得ることを意味しています。例えば、英語学習を通して成功体験を得れば、英語を使う職業につき、やりがいある仕事を全うするかもしれません。一方で、どうしても英語を好きになれなければ、英語を諦め、その時間を別の有意義なことに使うかもしれません。英語に向き合うことは人生のウェルビーイング (well-being: WB) の一部なのです。そしてWBの実現には深い自己理解が必要であり、そこで不可欠なのが前節で述べた「言葉」の力なのです。自分の英語学習・習得について適切に言語化することで英語に向き合うことができます。本節では「言葉」を通じた「自律の達成」と「WBの追求」について考察します。

英語学習者としての自律が何を意味するかには様々な議論があり、少し複雑です。そこで、よりシンプルに考察するためにメタ認知という考え方を紹介します。メタ認知とは、広義には自分の認知活動（英語学習等）を俯瞰するための一段階上の認知を指します。メタ認知の達成には（1）対象に関する知識、（2）その知識に基づく対象のコントロールが必要だと言われています（Bruer, 1998）。（1）について、本稿でも触れたように、まずは英語学習には様々な要因が影響することを知る必要があります。本稿の内容はあくまで概論ですので、より深く知っていく必要があるでしょう。その上で（2）に移り、自身の英語学習をコントロールしていきます。この過程で中心となるのが言葉です。例えば、皆さんは以下のような質問にどれだけスムーズかつ適切に答えることができますか？

- (a) 現在、適切な英語学習方略を用いていますか？それはなぜ適切なのですか？ 問題点があるなら、それをどう改善したらいいですか？
- (b) 自分の性格が学習に与える影響にどう向き合えばいいですか？
- (c) 自分の感情をどうコントロールすれば、より良い英語学習につながると思いますか？

例えば、大学生になると、受験対策の英語とは異なった学習方略が必要です。もしあまり考えずに受験英語用の方略を継続していたとしたら、それは適切な方略ではない上に、その理由や効果を明確に言語化できないでしょう。また、本稿を読むまで性格が英語学習・習得に影響するなんて考えたこともなかったかもしれません。この場合もその影響力を言葉で説明することはできません。言語化できればこそ自己理解につながり、結果としてメタ認知による適切なコントロールが可能になるのです。

最後に英語学習者の WB について考えます。これはいわゆる「幸せ」に近い概念ですが、自律と同じく学問的な定義は複雑です。ここでは心理学の知見から主観的 WB (subjective well-being: SWB) という考え方を援用して考察したいと思います (Diener, 1984)。

SWB はいわゆる主観的な満足感であり、特定の対象について自身がどの程度満足しているかを指標とします。前掲の例で言えば、英語が好きで英語を使う職業につき仕事を全うすれば SWB は高いでしょう。一方で、仮に英語を諦めても、それが自分の意志によるもので、その時間を別の有意義なことに使えたとしたら、同じく SWB は高いかもしれません。すなわち、どのような英語学習・習得であっても、自身の満足感があれば SWB は満たされていると考えられます。

一方で、SWB は「何でもあり」の考え方ではありません。英語学習・習得に関する SWB でもいくつか満たすべき条件があると筆者は考えます。まず上述の自律は大前提です。自身の学習を言語化して真摯に向き合う過程なくして SWB の実現は難しいでしょう。同時に、SWB のような心理的満足の充足には言語化できない部分にも着目する必要があると思います。人間には「言葉にはできないけれど…」 「なぜかは分からないけれど…」といった感覚を伴う経験が確かにあります。こうした面も人間の幸福には重要であり、心理学でも人の無意識的側面として黎明期から注目されています。筆者はこうした言語化できない面を知るには、限界ぎりぎりまで言語化を推し進める必要がある

と考えています。言葉での理解を広げることでこそ、言葉にできない領域の輪郭を知ることができるのです。その意味で、自律に伴う自己の言語化は、言語化できない側面に関連する SWB ともつながっているのです。最後に、自身の選択に責任を取ることも重要です。例えば、自身の SWB のために英語学習を諦めても、後にそれを深く後悔し、過ちとして引きずっていても SWB にはつながりません。自分の選択を自分で引き受けていく姿勢が問われるでしょう。

■ おわりに

英語学習・習得に関する個人差要因から始まった本稿ですが、最後は「幸せ」の話になってしまいました。しかし、これは本来あるべき流れそのものだと筆者は考えます。英語に限らず、何かを学ぶことは生きる力を得ることです。生きる力とは自身を幸福にする力です。皆さんが英語を学ぶことで、英語力の向上だけでなく、自身の人生についても考えて頂ければ、一人の英語教育者としてこれほどの幸せはありません。

参考文献

- Bruer, J. T. (1998). Education. In W. Bechtel & G. Graham (Eds.), *A companion to cognitive science* (pp. 681-690). Blackwell.
- Carroll, J. B. (1981). Twenty-five years of research on foreign language aptitude. In K. C. Diller (Ed.), *Individual differences and universals in language learning aptitude* (pp. 83-118). Newbury House.
- Diener, E. (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95(3), 542-575.
- Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). *The psychology of the language learner revisited*. Routledge.
- Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007). Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92(6), 1087-1101.
- 廣森 友人 (2015). 英語学習のメカニズム：第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法 大修館書店
- 松村 昌紀 (2009). 英語教育を知る 58 の鍵 大修館書店
- Oxford, R. L. (2011). *Teaching and researching language learning strategies*. Longman.
- Poropat, A. E. (2014). Other-rated personality and academic performance: Evidence and implications. *Learning and Individual Differences*, 34, 24-32.
- Sawyer, R. K. (2012). *Explaining creativity* (2nd ed.). Oxford.
- Suzuki, S., Yasuda, T., Hanzawa, K., & Kormos, J. (2022). How does creativity affect second language speech production? The moderating role of speaking task type. *TESOL Quarterly*, 56 (4), 1320-1344.
- Yasuda, T., Suzuki, S., & Hanzawa, K. (2019, August 30). *Predictive power of a language test and personality traits on L2 speech productivity, complexity, accuracy, and fluency* [Paper presentation]. The 29th conference of the European Second Language Association, Lund, Sweden.